
THE
SPARKS
BROTHERS
A FILM BY EDGAR WRIGHT



謎に包まれた唯一無二のバンド「スパークス」の世界へようこそ

もはや伝説。誰にも真似できないスパークスを探る、エドガー・ライト監督初の音楽ドキュメンタリー

「私にとってスパークスは永遠の謎なんだ」

そう語るのは、本作で初のドキュメンタリー映画に挑戦したエドガー・ライト。長編デビュー作のゾンビ・コメディ『ショーン・オブ・ザ・デッド』(04)以降、『ベイビー・ドライバー』(17)や『ラストナイト・イン・ソーホー』(21)など、常に異なるジャンルでコアな映画愛と斬新な映像表現を炸裂させ映画ファンを熱狂させてきた、イギリス映画界の鬼才である。

そんな彼が、長年大ファンだと公言するアート・ポップ・デュオ、スパークスに2年間密着、長時間にわたるインタビューを行い、ワールド・ツアーに同行。総勢80名の関係者、影響を受けたアーティスト、ファンらの証言をまとめ上げ、膨大なフッテージとアニメーションを駆使して、究極のスパークス・クロニクルともいうべき長編ドキュメンタリー映画を完成させた。

1970年代のデビュー以来、約50年もの間、唯一無二の存在感を放ち続けるバンド、スパークス——端正なルックスと華やかな立ち振る舞いの弟ラッセルと、チャップリンを思わせる奇天烈なちょび髭ルック＆独特な表情でキーボードを奏でる兄ロン。

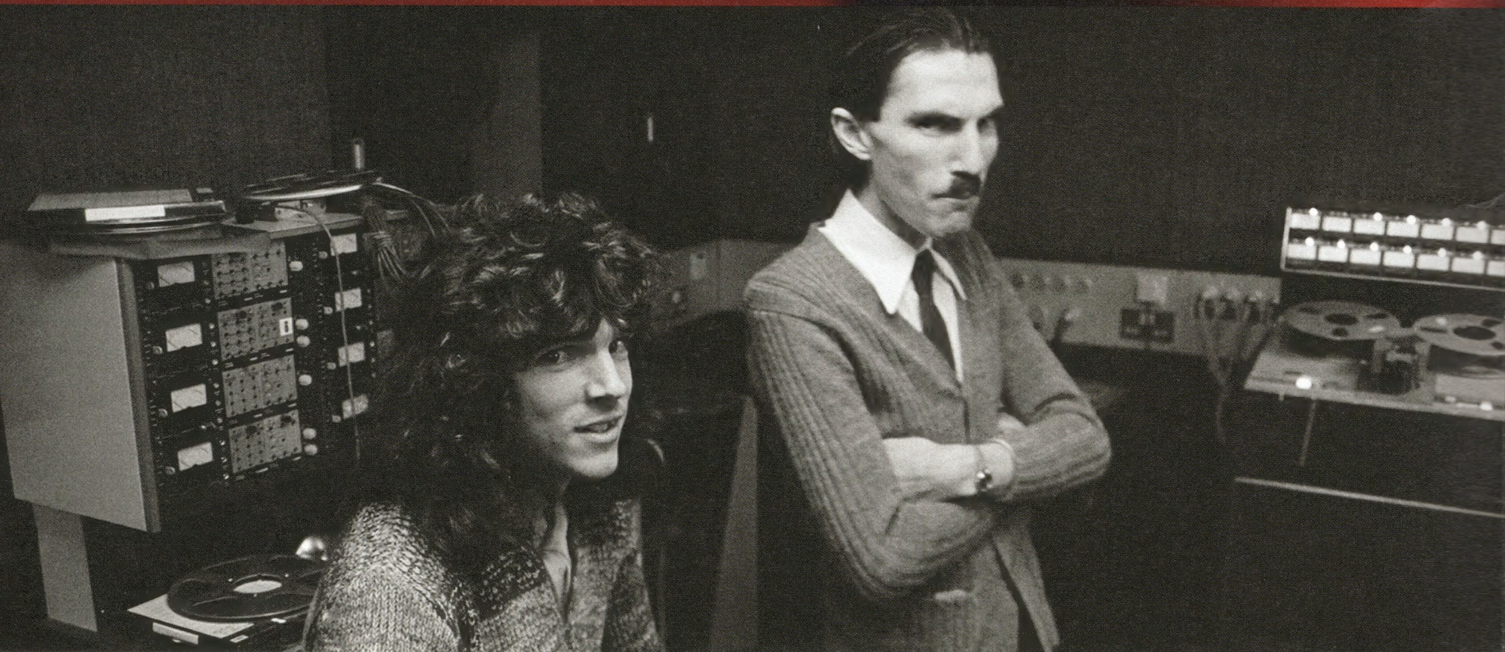
ロンとラッセルはカリフォルニアで生まれた。ロンは1945年にカルバー・シティで、ラッセルは1948年にパシフィック・パリセーズで誕生し、芸術に造詣の深い両親の下、アメリカン・ロックンロール、英国の人気バンド、ヌーヴェルヴァーグ映画、シュルレアリスム、風刺的ユーモアに囲まれて育った。

彼らが世に与えた影響、功績を語るのは、ベック、フリー(レッド・ホット・チリ・ペッパーズ)、アレックス・カプラノス(フランツ・フェルディナンド)、トッド・ラングレン、デュラン・デュラン、ニュー・オーダー、ビョーク、ジョルジオ・モロダー、マイク・マイヤーズら錚々たるアーティストたち。けっして世界的にメジャーとは言えないスパークスの驚くべき独創性と先進性、彼らへの愛を、あますことなく語り尽くす。

本作では、幼少期の生い立ちに始まり、「キモノ・マイ・ハウス」や「No.1イン・ヘブン」で一世を風靡した70年代、80年代後半〜90年代前半の低迷期を経て、再びシーンの最前線に躍り出て、第一線を走り続ける現在までを時代ごとに追っていく。ジャック・タチ、ティム・バートンら著名な映画監督たちとの幻に終わったプロジェクトや、フランスの鬼才監督レオス・カラックスとのコラボレーション作『アネット』(21)などのエピソードも登場。エドガー・ライト監督ならではのアップテンポな編集とアニメーション＆タイポグラフィを駆使した演出で、知る人ぞ知るレジェンド・バンドの知られざる素顔に肉薄する。

他人と違うこと、世間に理解されないことをモノともせず、流行に流されることなく、半世紀以上もの間、自分たちの音楽＝生き方を貫き、誰にも真似できない孤高の境地へとたどり着いたスパークス・ブラザーズ。この映画を観終わったあと、あなたもきっと、彼らのファンになっているに違いない。









ロンとラッセル・メイル兄弟インタビュー

★スパークス初のドキュメンタリー映画ですが、制作の始まりはどんなスタートだったのでしょうか？また、映画で新たな発見はありましたか？

ラッセル：エドガー・ライトから「これほど支持されているのに、誰もスパークスのドキュメンタリー映画を作ってない！これを作るのは僕の任務だ！」と言われてね（笑）。彼の映画作りの感性は僕らの音楽作りの感性と似ていて波長が合った。エドガーは、"今のスパークスを撮りたい。今も昔と同様に素晴らしい音楽を作っているのだから"とも言ってくれた。

ロン：僕らはある意味、自分たちの世界の中でしか仕事をしてこなかったから、知らないことがたくさんあった。ミュージシャンだけでなく、俳優やコメディアンにも僕らのファンがいるとは思っていなかったので嬉しかったね。

★エドガー・ライト監督は本編中に"ファン"という肩書で登場しますが、彼の熱量を感じた点があれば教えてください。

ラッセル：エドガーは1979年に僕らを知って以来、気にしてくれていた。"一発ヒットを出して消えるアーティストはたくさんいる。でもヒットを出しては消えて、戻ってきては、また消えて、また戻る。そしてその度に新しいファンを開拓し、成功や失敗にかかわらず前に進む。そういうポップグループは他にいないじゃないか？"とはエドガーの弁だけれど、ファンに言われたら嬉しい言葉だった。

ロン：この映画はエドガーにとって、初のドキュメンタリー作品だ。売れっ子であるにもかかわらず、彼は本作に3年もの歳月を費やした。それが彼の熱意の証明じゃないかな。僕らとしてはスパークスのドキュメンタリーであっても、彼の映画であって欲しかった。出来上がった映画を見て、そうなっていたことが嬉しかったよ。

★2018年の来日公演や柴又散策など日本の風景も収めていますが、当時の思い出は？

ラッセル：渋谷のレコードショップに立ち寄ったら、たまたまスパークスのＣＤを買っていたファンと遭遇したことがあった。実は、この映画の撮影は日本から始まったんだ。渋谷でのライブの場面ではエドガーが自らカメラを持ち、ステージと客席の間のピットで撮影していた。"どいて欲しいなあ"とも思ったけれど、言えなかったね（笑）。公演以外では、僕らが日本で好きな場所をいくつか提案し、そこで撮影した。

ロン：僕らの日本への愛情にエドガーは驚いていた。柴又に行ったのは僕らが「寅さん」を大好きだからだ。アメリカで『男はつらいよ』を知っている人はなかなかいないし、イギリスでもそう。でも僕らは大ファンとして聖地巡礼をしなければならなかった（笑）。

★この映画はすでに世界各地で公開されていますが、心に残った感想・反応があれば教えてください。

ラッセル：本作で初めてスパークスに接する観客も多かった。25枚（海外での映画公開の2021年時点）もアルバムを出しているのに、知られていないのか……と思いもしたけれど（笑）、若いファンの中には、これから25枚聴けることを喜んでくれている人もいた。それと、クリエイティブなものをつくるとき、それが成功しようとしまいと、自分のビジョンは変えないということ。お金を稼ぐことにはつながらないかもしれないけれど、ビジョンと思いは残るし、それは誰かに確実に伝わるものだ。そこに若い観客が共感を覚えてくれたのが嬉しかったね。

ロン：僕らはあくまでミュージシャンだし、人生の教訓を説くつもりはまったくない。ただ、やるべきことをやってきて今がある。それだけのことだが、その"それだけ"をエドガーが映画に収めた。そこから若い観客が何かを感じてくれたのなら、僕らの強さを証明できたということなのかもしれないね。

取材＆構成：相馬学


KODAK SAFETY FILM 6057
KODAK SAFETY FILM 6017

彼らは一体、何者なのか？

スパークス　バイオグラフィ

Sparks（Ron Mael, Russell Mael）

スパークスはロン・メイル（1945年8月12日生まれ）とラッセル・メイル（1948年10月5日生まれ）の兄弟を中心にしてLAで結成された（ファンファーレ！）。二人はいくつかのバンドを経て1968年にハーフネルソンを結成。71年にファースト・アルバム「Halfnelson」を発表したが、72年にスパークスと改名して、セカンド・アルバム「A Woofer in Tweeter's Clothing」（1972年）を発表する。1973年からイギリスに拠点を移し、メイル兄弟のユニークなキャラクターが注目を集めるなかで「Kimono My House」（1974年）が大ヒット。バンドは一躍、10代のアイドル的な存在になる。イギリスで３枚のアルバムを発表した後、スパークスはロンとラッセルのデュオ編成となり、76年にアメリカへ帰還。79年にシンセサイザーを導入した「No.1 In Heaven」を発表し、その斬新なサウンドでロック・シーンに大きな影響を与えた。「Whomp That Sucker」（1981年）からバンド編成に戻り、ＬＡを拠点に活動。ロンがストリップを披露するミュージック・ビデオが話題になった「I Predict」（1982年）や、ゴーゴーズのジェーン・ウィードリンが参加した「Cool Places」（1983年）といったシングル曲がヒットして、スパークスはアメリカの若者たちの間で人気を得た。88年から94年の間はアルバムは発表せず、日本の漫画「舞」の映画化に取り組むが企画は消滅。６年ぶりの新作「Gratuitous Sax & Senseless Violins」（1994年）に収録された「When Do I Get to Sing "My Way"」がヒットしてバンドはロック・シーンにカムバックを果たす。「Lil' Beethoven」（2002年）ではクラシックを独自の手法で取り入れて新境地を切り開き、2009年にはスウェーデンのラジオ局に依頼されてミュージカル「The Seduction of Ingmar Bergman」を制作するなど、次々と新しい試みに挑戦。そして2021年にレオス・カラックス監督によるミュージカル映画『アネット』が公開され、スパークスが手掛けたサントラはカンヌ国際映画祭「サウンドトラック賞」、セザール賞「最優秀オリジナル音楽賞」を受賞した。活動50年を超えた今、スパークスは新たなピークを迎えているのだ。

テキスト：村尾泰郎

Discography

1971. ハーフネルソン　Halfnelson
1972. ウーファー・イン・トゥイーターズ・クロージング　A Woofer in Tweeter's Clothing
1974. キモノ・マイ・ハウス　Kimono My House
1974. 恋の自己顕示（プロパガンダ）　Propaganda
1975. スパーク・ショー　Indiscreet
1976. ビッグ・ビート　Big Beat
1977. イントロデューシング　Introducing Sparks
1979. No.1イン・ヘブン　No. 1 in Heaven
1980. ターミナル・ジャイブ　Terminal Jive
1981. 弱い者いじめ　Whomp that Sucker
1982. アンガスト・イン・マイ・パンツ（パンツの中の用心棒）　Angst in My Pants
1983. イン・アウター・スペース　In Outer Space
1984. プリング・ラビッツ・アウト・オブ・ア・ハット　Pulling Rabbits Out of a Hat
1986. ミュージック・ザット・ユー・キャン・ダンス・トゥ　Music That You Can Dance To
1988. インテリア・デザイン　Interior Design
1994. 官能の饗宴　Gratuitous Sax & Senseless Violins
1997. プレイジャリズム～盗作の世界　Plagiarism
2000. ボールズ　Balls
2002. Lil' Beethoven（原題）
2006. ハロー・ヤング・ラヴァーズ　Hello Young Lovers
2008. エキゾチック・クリーチャーズ・オブ・ザ・ディープ　Exotic Creatures of the Deep
2009. The Seduction of Ingmar Bergman（原題）
2013. Two Hands, One Mouse: Live in Europe（原題）
2015. FFS
2017. ヒポポタマス　Hippopotamus
2020. A Steady Drip, Drip, Drip（原題）
2021. 『アネット』オリジナル・サウンドトラック　Anette

止まることなく変化し続ける～スパークスの音楽

村尾泰郎（映画／音楽ライター）

スタイルを作っては壊し、また新しいものを生み出す。それを繰り返すことがスタイルとなったスパークス。彼らが最初に作り上げたスタイルはスパークス流グラム・ロックだった。初期の代表作「Kimono My House」（1974年）では、派手なギター・サウンドに乗ってラッセルのファルセット・ヴォイスが華麗に舞う。当時、ロック・バンドがファルセットで歌うのは異色。ロンが書いた曲に合わせて歌った結果だったが、それがスパークスの特徴のひとつになる。そして、そんななかに知的なポップ・センスが息づいていて、モリッシーやビョークも愛する名盤だ。続く「Propaganda（邦題：恋の自己顕示）」（1974年）では曲の複雑さはエスカレートして、1曲のなかでテンポや曲調がめまぐるしく変化。まるでジェットコースターに乗るようなドラマティックな展開に翻弄される。そして、早くもグラム・ロックというスタイルに決別したのが「Indiscreet（邦題：スパーク・ショー）」（1975年）だ。ジャズやクラシックの要素を取り入れて、曲ごとにまったく違うスタイルに挑戦。遊び心と実験精神が表裏一体となっているのはまさにスパークス流だ。

その後、スパークスは新たなスタイルを模索。パンクの嵐が吹き荒れるＮＹに向かい、サーストン・ムーアいわく“スパークス流パンク”「Big Beat」（1976年）を制作。かと思ったら、続く「Introducing Sparks」（1977年）はデヴィッド・フォスターやリー・リトナーなど腕利きのセッション・ミュージシャンとＬＡでスパークス流ウェストコースト・サウンドを作り上げるなど、流行のシーンを現地調査するようにアメリカを横断した。そして、ディスコに興味を持った２人は再びヨーロッパに渡って、新進気鋭のプロデューサーのジョルジオ・モロダーと組んで、シンセサイザーとダンスビートを取り入れた「No.1 in Heaven」（1979年）を発表。スパークス流テクノ・ポップというスタイルを作り上げたが、本作がニュー・オーダーやデペッシュ・モードなど若い世代のアーティストに与えた衝撃は大きかった。

80年代に入り、「ロックはもう古い！」と若者たちが新しいサウンドを求めてニュー・ウェイヴというシーンが生まれるなかで、スパークスはデヴィッド・ボウイと並んで彼らに影響を与えた数少ない先輩だった。それはスパークスが本来持っている「新しいスタイルの追求」や「シニカルなユーモア」がニュー・ウェイヴの特徴に一致したからだろう。80年代はシンセとバンド・サウンドを融合させてスパークス流ニュー・ウェイヴを確立。この時期の代表作は「In Outer Space」（1983年）で、当時、大人気だった女性ロック・バンド、ゴーゴーズのジェーン・ウィードリンがラッセルとデュエットしたシングル曲「Cool Places」はスマッシュヒットを記録する。ジェーンはスパークスのファンクラブを主催していたほどの熱烈なファンだった。

90年代に入ると、スパークスは自分たちのスタジオを拠点に実験を繰り返していく。なかでも、大きな転機になったのが「Lil' Beethoven」（2002年）だ。カムバック作「Gratuitous Sax & Senseless Violins（邦題：官能の饗宴）」（1994年）以降のエレクトロニック・ポップ路線に新鮮さを感じなくなったスパークスは、このアルバムでダンサブルなビートを廃止。シンセ・ストリングスやラッセルの声を多重録音し、短いフレーズをモザイク状に積み

重ねてオーケストラのようなサウンドを作り上げた。このクラシックとテクノを融合したような斬新なアプローチが2000年代のスパークスの突破口になる。
そして、2010年代に入り、フランツ・フェルディナンドとのコラボ「F F S」(2015年)でバンド・サウンドに新たな可能性を見出したスパークスは、久しぶりにポップさを全開にした「Hippopotamus」(2017年)を発表。これまで彼らが切り開いてきたスタイルがすべて詰め込まれた本作は、スパークスというバンドをコンセプトにしたような内容で、イギリスでは「Propaganda」以来、43年ぶり(!)にトップ10チャートに入った(最高で7位)。そして、この「スパークスのいいとこ取り」路線は最新作「A Steady Drip,Drip,Drip」(2020年)でも引き継がれて、本作はイギリスのインディー・チャートで1位を記録する。その一方で初めて挑戦した、そして、長年作ることを夢見ていたミュージカル映画『アネット』のサントラ(2021年)も高い評価を受けて今や無敵状態のスパークス。映画でラッセルが言っていたように、医療が発達して今後300枚アルバムを作ることになっても。彼らのサウンドはとどまることなく変化し続けるに違いない。





1.ハーフネルソン
Halfnelson



2.ウーファー・イン・トゥイーターズ・クロージング
A Woofer in Tweeter's Clothing



3.キモノ・マイ・ハウス
Kimono My House



4.恋の自己顕示(プロパガンダ)
Propaganda



5.スパーク・ショー
Indiscreet



6.ビッグ・ビート
Big Beat



7.イントロデューシング
Introducing Sparks



8.No.1イン・ヘブン
No. 1 in Heaven
(OTLCD7548・SOLID/REPERTOIRE)



9.ターミナル・ジャイブ
Terminal Jive



10.弱い者いじめ
Whomp That Sucker
(OTLCD7552・SOLID/REPERTOIRE)



11.アンガスト・イン・マイ・パンツ
Angst in My Pants
(OTLCD7546・SOLID/REPERTOIRE)



12.イン・アウター・スペース
In Outer Space
(OTLCD7547・SOLID/REPERTOIRE)



13.プリング・ラビッツ・アウト・オブ・ア・ハット
Pulling Rabbits Out of a Hat
(OTLCD7549・SOLID/REPERTOIRE)



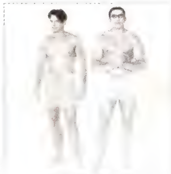
14.ミュージック・ザット・ユー・キャン・ダンス・トゥ
Music That You Can Dance To
(OTLCD7551・SOLID/REPERTOIRE)



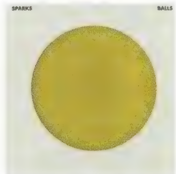
15.インテリア・デザイン
Interior Design



16.官能の饗宴
Gratuitous Sax &
Senseless Violins



17.プレイジャリズム～盗作の世界
Plagiarism



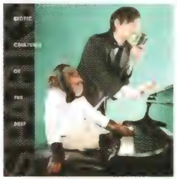
18.ボールズ
Balls



19.Lil' Beethoven(原題)



20.ハロー・ヤング・ラヴァーズ
Hello Young Lovers



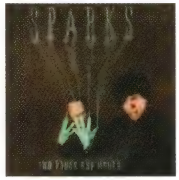
21.エキゾチック・クリーチャーズ・オブ・ザ・ディープ
Exotic Creatures of the Deep



22.The Seduction of
Ingmar Bergman(原題)



23.FFS



24.Two Hands, One
Mouse: Live in Europe
(原題)



25.ヒポポタマス
Hippopotamus



26.A Steady Drip, Drip,
Drip(原題)



27.『アネット』オリジナル・サウンドトラック
Annette

スパークスを愛する面々

山崎まどか（コラムニスト）

スパークスを愛する面々、彼らから影響を受けたミュージシャンたちがロンとラッセルのメイル兄弟のために集結している『スパークス・ブラザーズ』だが、よく見ると音楽関係者でない人の姿もチラホラ見かける。特に音楽ファンにとって謎なのが、エイミー・シャーマン・パラディノとダニー・パラディノの存在だろう。昔からスパークスのファンだと公言するこの夫婦は人気ドラマ「ギルモア・ガールズ」（００〜０７）と「マーベラス・ミセス・メイゼル」（１７〜）のクリエイターとして知られている。絶妙にマニア心をくすぐる選曲でも有名で、当然「ギルモア・ガールズ」にはスパークスの曲も使われている。コネチカット州の小さな街スターズホローを舞台とするこのこぢんまりとしたドラマにおよそ似合いそうにないのに、彼らはパラディノ夫妻が最後に監督・脚本を手がけた「ギルモア〜」のシーズン６最終話にゲスト出演まで果たしているのだ。とある理由でストリート・ミュージシャンたちがスターズホロー（＊舞台となっている架空の街）に集結するというこの回で、スパークスはヨ・ラ・テンゴやサーストン・ムーアとキム・ゴードン、二人の娘のココのファミリー・バンドに混じって、当時の新曲「パフューム」のストリート・バージョンをプレイした。演技する二人の姿も見られる貴重なエピソードだ。

パラディノ夫妻のドラマを見ると、二人がただ彼らの音楽のファンというだけではなく、スパークスの奇妙なユーモア・センスからも影響を受けているのがよく分かる。スパークスのようなバンドの価値が本当に決まるのは時間が経って、彼らをリスペクトし影響を受けたサウンドを奏でるミュージシャンが出てきてからだが、スパークスの及ぼしたものは音楽の枠を超えている。音楽のプロたちが好むミュージシャンズ・ミュージシャンという言葉があるが、コメディアンズ・ミュージシャンでもあるのだ。それが証拠に、『スパークス・ブラザーズ』には数多くのコメディアンが登場する。それも一筋縄ではいかない、ひねったユーモア・センスの持ち主ばかり。パンク・ドラマーでもあるフレッド・アーミセン。映画・音楽・フードといったサブカルチャーへの見識とそれをもとにしたジョークで知られている小柄なパットン・オズワルト。90年代のオルタナ的な感覚を彼女のスタンダップに取り入れることで知られている音楽オタクのエイプリル・リチャードソン。時に彼らは自分が好きなものさえもギャグの対象とするが、その際の距離感の取り方にスパークスの音楽の影響を感じる。

この人選にクールさと共に、やはりミュージシャンではないが彼らの影響を大きく受けたエドガー・ライトの意図を感じる。笑っていいのか悪いのか、どこまでが本気なのか分からないスパークスのユーモア・センスは、時にシリアスなミュージシャンとしての彼らの評価の妨げとなるものだった。彼らがロック史において時代／スタイルでどこの一派にも属せず、傍流扱いされてきた原因のひとつでもある。しかし音楽と共にハイブリットである彼らの笑いのセンスは、結果的に大きな流れを作り、広い分野に波及している。このドキュメンタリーを見て、自分たちの一生をかけて「スパークスであること」を貫こうとする兄弟の姿勢に、大きな感銘を受ける若い世代もいるに違いない。そういうひねくれたセンスを持つ小さな集団から生まれるのは、ミュージシャンだけではない。そして気がつくと“スパークス的なもの”が文化の周囲に溢れている。現在の彼らの評価はその結果であり、スパークスの入門編にして決定版といえるこのドキュメンタリーによって、その影響は長く続く、永続的なものになるかもしれない。

アートの至福へ突き進む、スパークスという求道

相馬学（ライター）

2018年8月20日、東京のクラブクアトロで行なわれた、スパークスの来日公演は素晴らしかった。多幸というか、至福というか。よりうまく言い表わす言葉があるとは思うが、それはスパークスの魅力を語るのと同じくらい難しい。それを提示したのが、本作『スパークス・ブラザーズ』。ひとクセどころか、ふたクセもみクセもあるスパークスの、そんな“クセ”のひとつひとつを、エドガー・ライト監督は愛とユーモア、才気とともに語ってくれる。

オープニングから、いきなり笑ってしまったのだが、“ファンファーレ！　映画が始まるファンファーレ！～”というラッセルの歌が響く。本作のためにスパークスが提供した小曲「ファンファーレ」。こういうトボケたユーモア感覚がスパークスの魅力のひとつであることは、劇中でも紹介される歌詞やアルバムジャケットのアートワークからも明らか。その点で興味深いのは、レッド・ホット・チリ・ペッパーズのフリーの発言。“ポップミュージックで僕がとまどうのは、ユーモアに対する受容性の欠如だ。だからスパークスはビッグになれない。面白過ぎるから”とコメントをしているが、これはロック史におけるスパークスの立ち位置を的確に表わしているのではないだろうか。

　スパークスの音楽性の変遷についても、ライトは丁寧に検証を試みる。“ヘンテコ”と称されるポップミュージックから始まったスパークスの楽曲はグラムロック風だったり、クラシック風だったり、サーストン・ムーアが劇中で語るところの“新しいパンク”だったり。中でも、シンセサイザーに注目してエレクトロポップの始祖となったエピソードに時間が割かれているが、これはライト監督が初めて聴いたスパークスの曲であることも関係しているだろう。何より、本作が伝えるスパークスの魅力は音楽性こそ変化しても、決してブレない創作への姿勢。スパークスはこれまでのところ、ローリング・ストーンズやマイケル・ジャクソンのようなビッグなポップスターにはなっていない。セールスの点では、劇中で語られる通り“何度となく「終わった」アーティスト”である。シネフィルらしく映画音楽にも挑んだが、2度の挫折を味わった。しかし、それらは“売れっ子”という現象の上での話。劇中でラッセルは“レコードを２兆枚も売ってはいないかもしれない。でも、自分のビジョンに忠実で、長く一貫していること。それが成功の尺度だと思う”と語る。ユーモアにしても音楽性の変化にしても、冒険を恐れないアーティストが、そこにいる。そういう意味では、スパークスはポップスターというよりアーティスト、さらにいえば求道者だ。『スパークス・ブラザーズ』の主題は、まさにそれ。イメージ的にヘンテコではあっても、つねに前進し続ける。だからこそ、今現在がキャリアのピークと断言できるのだろう。

2018年の来日公演に話を戻そう。このとき、ライト監督は彼らに同行して、来日時の映像をカメラに収めていた。映画の中ではオフの映像とともに、あのときのライブの模様を一瞬だが見ることができる。ライト自身が撮影した映像はステージの模様から、フロアで熱狂するオーディエンスをはっきりととらえていた。この日も「No.1 ソング・イン・ヘヴン」はプレイされたが、東京のオーディエンスはまさに“天国のヒット曲”を体感しているかのよう。求道者であるスパークスだからこそたどりつけた極楽浄土が、そこにあった……というのは当たらずとも遠からずだと思う。映画ではその後のコロナ禍での歩みも語られ、レオス・カラックス監督とのコラボレーションとなる映画『アネット』の企画の実現も紹介される。そんな姿に、パンデミックでも歩みを止めない彼らの強さが見えてくる。本作の公開に併せて、メイル兄弟にインタビューする幸運な機会をいただいたが、“コロナ禍が収まったら必ずまた日本に行く”と明るく語ってくれた。あの至福のときが再び訪れることを願いつつ、筆者も今一度、自分が前に進んでいるかを考えてみようと思う。






ARKS





21世紀こそ、スパークスの時代

文:岸野雄一(勉強家<スタディスト>)

どの時代のどの曲を聴いても、スパークスの楽曲はまぎれもないポップ・ソングであり、難解さのかけらもない。しかしながら、スパークスは謎の多いバンドと言われてしまう。いったい何故なのだろう。その理由のひとつとして、音楽性の多彩さがあげられる。スパークスを音楽のジャンルで捉えようとすると、時代によってコロコロ変わり、一貫性がない。この事がまずバンドの印象を捉えにくくしている。

ある時は典型的なアメリカン・ポップス、ある時はきらびやかなグラム・ロック、ある時はハードな疾走感溢れるパンク・ロック、ある時はディスコで踊れるテクノポップ、といった具合だ。スパークスは、そのようなジャンルによる嗜好をすり抜けて存在している。この事はある意味で、新規のファンを獲得する障害ともなっていた。

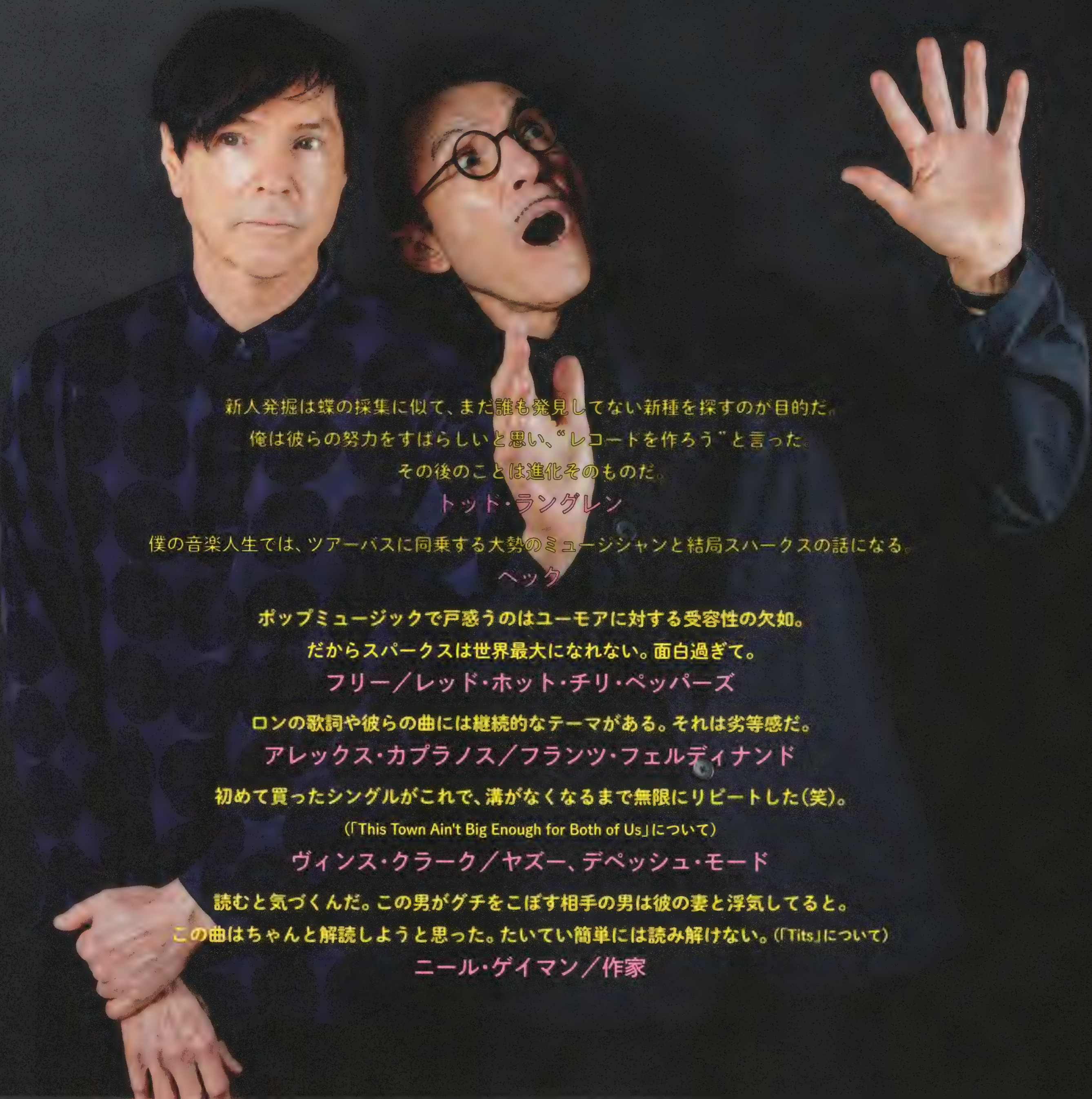
たいていの場合、音楽ファンは、ある固有のジャンルが好きという場合が多い。つまり、ロック・ファンはテクノを聴いて踊らないし、パンクの客層はオペラ的な複雑な曲の展開を好まない。「スパークスって良いらしいね」という噂を聞いて、あるジャンルのファンがそのサウンドに初めて触れた時に、自分の嗜好と違っていた場合、「ああ、この手のサウンドね。私の趣味じゃないな」と、それ以降、2度と耳を貸さなくなってしまうのだ。この事は古くからのファンにとっても困惑させられる原因となっていた。

スパークスは良い意味でファンを裏切り続ける。その度にファンは、「ああ、私の好きなスパークスは変わってしまった」と困惑してきた。この件についてロン・メイル、ラッセル・メイルは、「アルバムごとに、できればスパークスのあり方を捉え直すような、新しいことをやろうとしている」、「音楽的に常に挑戦的なことをやろうとしている」と取材で述べている。また、「変わっていった事もある。例えばバンドのメンバー。あとは録音のテクノロジーの方が変わっていった」とある。

スパークスはロン(キーボード及びソング・ライティング)とラッセル(ヴォーカル)というメイル兄弟によるバンドで、時代によって演奏メンバーは異なるが、基本的にこの2人組による兄弟バンドと考えて良い。この映画でも、日常生活も親密に過ごしている様が描かれている。よくあるバンド・ストーリーとして、学校の同級生だったので、お互いのやりたい事がツーカーで分かる、といった話が出るが、スパークスの場合はそれどころではない。生まれた時から見知った仲なので、本当にやりたい事というのは前提として共有されており、逆に音楽スタイルは好きなように変えていける強みがあるのだろう。そうした強みは、前世紀中にはマイナス要素として作用していたということだ。例えばレコード・ショップでは、どこのコーナーに置いて良いのか分からないという弊害が生じた。

しかし21世紀に入ってからは、彼らの音楽への評価や需要のあり方に変化が訪れた。音楽がショップではなくオンライン上で聴取される環境にあっては、どこのコーナーに置いてあるかなどは関係ない。ジャンルという垣根が取り払われ、若いリスナーたちが台頭すると、聴いたことのない音楽に対して、彼らはすべて新譜と同じ感覚で捉える。音楽的なジャンルの違いよりも、音楽自体の新鮮さを尊ぶ新たな評価軸が生まれていったように思う。幅広い音楽性は誤解を生む面もあったが、多様なジャンルを横断することによって、却って彼らの本質が浮かび上がったのだともいえる。真の評価を獲得する為には、こうした50年間に及ぶ迂回が必要だったのかもしれない。

そんな中でスパークスの音楽は常に再発見され、新たなリスナーを獲得していくこととなった。そして去年、このドキュメンタリー映画が制作されたこと、またスパークスが原案と音楽を手掛けたレオス・カラックス監督のミュージカル映画『アネット』の公開と、同作品がカンヌ国際映画祭で監督賞、音楽（サウンドトラック）賞を受賞した事により、再評価の気運は一気に高まった。これまで様々な音楽家が、インタビューの中でスパークスへのリスペクトを口にしてきた。そうしたきっかけから初めて聴き始めたファンも多いことだろう。この映画はそうしたスパークス愛に満ちた著名ミュージシャンの発言の集大成となっている。彼らの発言を聞けば「スパークスの謎」といった概念はたちどころに氷解するだろう。
ではスパークスの音楽の本質とは何なのだろうか？ロン・メイルの発言として以下のようなものがある。「僕たちはスタイルの信奉者なんだ。鈴木清順の映画に似ているかもしれない。それはある種のポップ感覚のようなものだ。表現の内実をスタイル（形式）が押さえ込むという」。つまり、猿が実を食べようとラッキョウの皮を剥いていったら、どこまでいっても皮ばかりで、結局、実は出てこなかった、という逸話に近い。皮の方が実（本質）だった、ということだ。これはスパークス流のアプローチのひとつである。
スパークスの歌詞には、ナンセンスに捉えられかねない、意味の解読の困難なスタイルのものがある。誰もが知っているポップ・アイコンを執拗にリフレインする事によって、別な意味を引き出そうとする試みや、ある言葉を発したら、あとはもう意味や物語を超えて、早口でまくし立てる言葉の連なりだけが疾走していくようなスタイルだ。それでいてスパークスの歌詞には、悲しい感情を面白く語ったり、面白い情景を物悲しく描写したりといった、エモーションの豊かさがある。それがキッチュやキャンプ、ポップ・アートといった表層的なスタイルにとどまらず、哲学的な示唆を含んだ領域にまで踏み込んでいるのだ。人間存在の根源的な孤独感や、関係の不条理にフォーカスした作品も多くあり、そこでは抜群のストーリーテリングと描写力、人間観察での洞察力を見せつけてくれる。このように、現実世界に足をつけながら、生活圏を離れることなく、それでいて舞台劇の音楽のように、我々を取り巻く状況や世界の有様を戯画化するのがスパークスの特徴だといえよう。スパークスの音楽を聴いていると、まるで自分たちが暮らす日常的な光景が、舞台の書き割りの美術のように見えてくる、という不思議な体験をすることになる。彼らが最初にテレビ・ショウに出演した際、およそロック・ミュージシャンとは思えないキーボードのロン・メイルの容姿や挙動が大きな話題となった。間違って連れてこられたような強烈な違和感。しかし、私たちもまた、自分たちの住むこの世界に、間違って連れてこられたような、強烈な違和感を感じる事はないだろうか？彼らの4枚目のアルバム「恋の自己顕示（プロパガンダ）」のジャケットのように、誘拐されたかのようにボートで連れ去られ、この世界に無理やり住まわされているような感覚を感じる事はないだろうか？　このような根源的な疎外感を、ポップ・センス溢れるサウンドで実現しているところが、スパークスの本質であり、大きな共感を生む魅力なのではないだろうか。



新人発掘は蝶の採集に似て、まだ誰も発見してない新種を探すのが目的だ。
俺は彼らの努力をすばらしいと思い、“レコードを作ろう”と言った。
その後のことは進化そのものだ。
トッド・ラングレン

僕の音楽人生では、ツアーバスに同乗する大勢のミュージシャンと結局スパークスの話になる。
ベック

ポップミュージックで戸惑うのはユーモアに対する受容性の欠如。
だからスパークスは世界最大になれない。面白過ぎて。
フリー／レッド・ホット・チリ・ペッパーズ

ロンの歌詞や彼らの曲には継続的なテーマがある。それは劣等感だ。
アレックス・カプラノス／フランツ・フェルディナンド

初めて買ったシングルがこれで、溝がなくなるまで無限にリピートした(笑)。
(「This Town Ain't Big Enough for Both of Us」について)
ヴィンス・クラーク／ヤズー、デペッシュ・モード

読むと気づくんだ。この男がグチをこぼす相手の男は彼の妻と浮気してると。
この曲はちゃんと解読しようと思った。たいてい簡単には読み解けない。(「Tits」について)
ニール・ゲイマン／作家



ファッション写真のようであり、それを揶揄してるようでもある。彼らのそこが好きだ。
変な方法で、自分で自分を嘲る。（アルバム「キモノ・マイ・ハウス」のジャケ写について）
マイク・マイヤーズ／俳優、脚本家

金も名誉も関係なく、彼らは音楽だけだ。尊敬する。
（アルバム「スパーク・ショー」後、アメリカに戻ったロンとラッセルについて）
イアン・ハンプトン／元スパークスメンバー（ベース）

驚くべきレコードだった。大胆不敵で。
流行を否定し、それを超えてしまった。
（アルバム「No.1イン・ヘブン」について）
サーストン・ムーア／ソニック・ユース

彼らの歌詞では定番の韻は踏まない。
常に内容の語り方も3回4回と外してくる。
登場するのは経歴まで考えられたキャラクターだ。
曲ごとにそんな個性がある。
パットン・オズワルト／スタンダップ・コメディアン、俳優、作家

スパークスは道を切り拓いてる。
それはアーティストの究極の能力で――現実の世界とは何ら関係がない。
ジャック・アントノフ／作詞・作曲家、プロデューサー

トッド・ラングレン
Todd Rundgren

XTCやホール＆オーツなど様々なアーティストを導いた音楽プロデューサーで、マルチプレイヤー。ハーフネルソン時代のスパークスを見出し、デビューのきっかけを作った。

ベック
Beck

90年代から第一線で活躍を続ける、アメリカを代表するアーティスト。世界的ヒット作「オディレイ」や「モーニング・フェイズ」などで数々のグラミー賞受賞歴を誇る。

フリー（レッド・ホット・チリ・ペッパーズ）
Flea (Red Hot Chili Peppers)

レッド・ホット・チリ・ペッパーズのベーシストとして1984年にデビュー。バンドはロックの殿堂入り、6つのグラミー賞受賞を果たしている。

アレックス・カプラノス（フランツ・フェルディナンド）
Alex Kapranos (Franz Ferdinand)

スコットランドのバンド、フランツ・フェルディナンドのフロントマン。2015年、「FFS」名義でスパークスとのコラボレーション・アルバム「FFS」を発表。

「スパークスのドキュメンタリーを作る」ということ

監督のエドガー・ライトはもちろん、本作の製作を手掛けたプロデューサーのニラ・パークやジョージ・ヘンケンら多くのスパークスファンにとっての"始まり"は、劇中でも紹介される1974年5月9日にBBCで放送された「トップ・オブ・ザ・ポップス」での、「This Town Ain't Big Enough for Both of Us」のパフォーマンスだったという。ただ、ライトが本作を製作するきっかけは風変わりなものだった。長年スパークスの大ファンだったライトがスパークスのTwitterのアカウントをチェックしたところ、幸運にもすでに2人はライトをフォローしていたという。「2人にメッセージを送ると、すぐに挨拶を返してくれた。『Twitterのアカウントを自分で管理しているバンドなんてほとんどいないよ！』と私が送ると、『僕たちは自分でやっているよ』と返事が来た。翌日、ビバリーヒルズのラッセルの自宅を訪れ、そこから素晴らしい友情が始まったんだ」

その後、ライトと友人たちは、ロサンゼルスで行われたスパークスのライブに出かけた。「ラッセルは未だに驚異的な声を持っているんだ」とライトは語る。「1970年代に活躍していた歌手の多くは、おそらくはドラッグやアルコールのせいで、今では当時と同じ声が出せない。でもロンとラッセルは、長期的な視点で人生に向き合い、心身の健康維持に努めてきたんじゃないかな。70 代にして2人のパワーは素晴らしく、ラッセルは今も高音で歌える。唖然とするくらいすごいんだよ。2017年に私は彼らのパフォーマンスを観た。バルコニーから客席を見下ろすと、16歳から60歳ぐらいまで、幅広い年代の観客がいた。私は友人に『スパークスが成功するために必要なのはただ1つ、彼らのこれまでを追ったドキュメンタリーだ』と言ったんだ。スパークスのことを知りたい人にとって、スパークスのアルバムの数が凄過ぎるし、英国、アメリカ西海岸、ドイツと異なった場所と時代で何度も黄金期を迎えている。翌日、私は彼らに直談判した。すると2人は『以前からドキュメンタリー製作の話はあったけれど、相応しい人々とは思えなくて断り続けてきた。でも、君なら相応しいと思う』と答えてくれたんだ」

可能な限り多くのスパークスの曲を、また彼らに影響を与えた音楽を映画で取り上げるのが重要だったとライトは語る。「ザ・ビートルズ、ザ・ローリング・ストーンズ、ビー・ジーズなら、ほとんどの人が知っているからキャリアの説明も数分で済むし、曲を紹介しなくてもいい。でもスパークスについてはしっかり説明する必要がある。ファンでさえ、よく知っているわけじゃない」

「2年余りにわたってロンとラッセルにインタビューを行った」とプロデューサーのローラ・リチャードソン。「ロンドン、東京、メキシコのツアー、そしてカリフォルニアの自宅にも同行して、様々な話を聞くことができたんです」



語られることで見えてくるスパークス

スパークスの協力者、関わりのあった人々、有名無名を問わないファンたちへの80回にも及ぶインタビューが、ロンドン、ロサンゼルス、サンフランシスコ、ブリュッセル、ニューヨークで行われた。そのうち79回のインタビューを、ライト自ら対面で行った。ゴーゴーズのジェーン・ウィードリンだけはスカイプでのインタビューとなった。

「音楽が持つスピリットを映画にも込めたいと考えていた。それにありがちなインタビューにはしたくなかった。だから自分がずっと聞きたかったことを質問したんだ」とライトは言う。「ミュージシャンだけじゃなく、様々な立場の人の話を聞くことができた。ロンとラッセルの友人やファンに語ってもらう試みも楽しかった。皆が語ってくれたストーリーは、この50年間のポップカルチャーの歴史そのものだよ」
ヘンケンは説明する。「話を聞かせてくれた人は皆、喜んで彼らのスパークス愛について語ってくれた。ロンとラッセルがいかに多くのアーティストにとって重要な存在で、影響力を持っていたのかが伝わってきた。皆長い時間を割いてくれて、インタビューが90分、時には2時間にもなることもあった」
映画の中でセクション間の橋渡しをしたり、エピソードの数々を描いたり、スパイスを加えたりするため、アニメーターのジョセフ・ウォレスとグレッグ・マクロードの力を借り、映画全体を通して物語により深みが加わった。
「メイル兄弟はとても映画的な感性を持っていて映画への興味も深いから、アニメーションや、ポンポンあちこちに飛ぶ映像がぴったりだと思ったんだ」とライトは言う。「映画には彼らのPVに出てくる映像と同じくらい面白いものを入れたかった」
ヘンケンは付け加える。「過去に撮影された映像、アニメーション、インタビューによって、彼らが50年余りにわたって発信してきたものの多彩さ、影響の大きさが浮き彫りになった。"スパークスらしいことなど何もない"、ということがいかにもスパークスらしいと思う」

スパークスはどこへ向かうのか？

ライトは言う。「スパークスのキャリアにおいて危機が何度も訪れたけど、彼らは運には頼らず才能で乗り切った。トッド・ラングレン、アイランド・レコード、ジョルジオ・モロダーをはじめとする人々も彼らを信じ、様々な局面で救いの手を差し伸べた。もうダメだ、というギリギリの場面で、2人の飽くなき熱意に心動かされた人に助けられることもあった。自分たちの手で、スパークスは自分たちを何度も生まれ変わらせた。意志の力だけでそれをやり遂げ続ける2人は、私たちを惹きつけてやまない」
「2人がどれだけ大変な時を耐え抜いてきたのか、映画を観れば分かってもらえるでしょう。彼らを理解してくれない人々、独特でクリエイティブなエネルギーに導かれて、金にならない方向へ進んでいく2人に当惑する人々。2人は自分たちの仕事に確固たる信条を持ち、他人にどう思われようとそれを貫いた。短期的な成功や人気を追いかけるより、はるかに報われることだと思う」とヘンケンは語る。
「スパークスがDNAに刻み込まれているアーティストは大勢いる」とヘンケン。「スパークスはあまりにも長く存在しているから、どこか計り知れないところがある気がする。でも実際には、彼らは自分たちの仕事に関してとても誠実なんだ」とライト。「50年にも及ぶ一貫した姿勢には、本当に心を動かされる。ロンとラッセルは私の知る限り、他のバンドにはありえないような超長期的なスタンスで活動してきたバンドだ。まるで昔話のウサギとカメのように、彼らは50年かけて成功を手にしたんだ」



エドガー・ライト監督が語る～スパークスとは何者か？

1979年に「No.1 ソング・イン・ヘヴン」をスパークスが歌っているのを見たことを覚えている。その後、親が買ってくれたコンピレーション・アルバムの中に「Beat the Clock」が入っていて、十代になってグラム・ロックのコンピレーションを買ったら、またスパークスが入っていた。でも、それまでの曲とは全然違っていた。90年代半ばに彼らが「When Do I Get to Sing "My Way"?」を歌うのを見たとき、同じバンドとは思えなかった。スパークスは謎の存在だった。

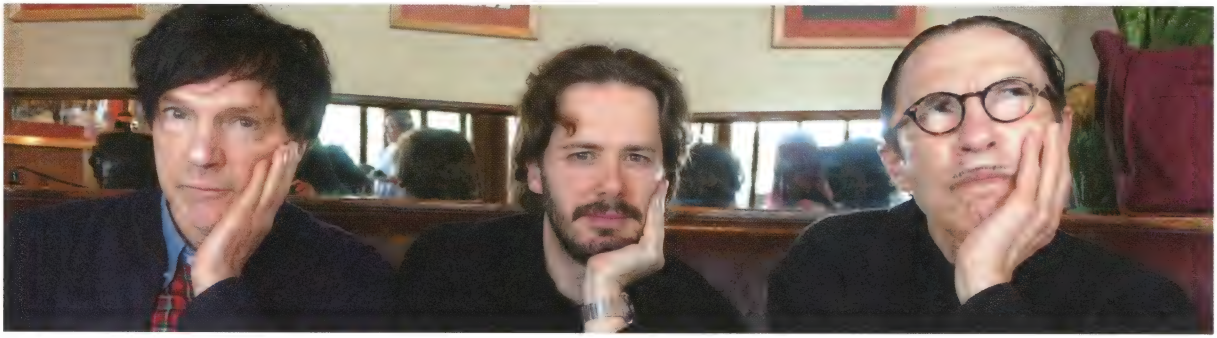
多くの人々にとっての謎は、彼らがカリフォルニアで育ったことだと思う。ドイツや英国のバンドに見えるからね。彼らの足跡は確かに受け継がれている。ジャック・アントノフはスパークスを最初に聴いた時、「デペッシュ・モードみたいだ」と思い、後で「そうじゃない。デペッシュ・モードがスパークスに似ているんだ」と気づいたという。同じことが他の多くのバンドにも当てはまる。

彼らはなぜ常に新鮮かつ挑戦的でいられるのだろう？妥協を許さないスパークスの姿勢が、メインストリームでの成功を阻んできたのは事実だ。しかし、その揺るぎない信念こそが彼らの本質だと思う。ファーストアルバムの発売から50年近くも経ってなおスパークスは人々に発見されるバンドなんだ。



エドガー・ライト（監督・製作）
Edgar Wright (Director / Producer)

1974年4月18日生まれ、イングランド・ドーセット出身。テレビシリーズ「SPACED ～俺たちルームシェアリング～」(99～01)を演出して注目を浴びる。以降、サイモン・ペッグとニック・フロスト、プロデューサーのニラ・パークとのコラボレーションが始まり、『ショーン・オブ・ザ・デッド』(04)、『ホットファズ 俺たちスーパーポリスメン！』(07)、『ワールズ・エンド 酔っぱらいが世界を救う！』(13)の"スリー・フレイヴァーズ・コルネット"3部作で監督を務める。ほかの監督作に、『スコット・ピルグリム VS.邪悪な元カレ軍団』(10)、『ベイビー・ドライバー』(17)、『ラストナイト・イン・ソーホー』(21)など。『タンタンの冒険 ユニコーン号の秘密』(11)の脚本、『アタック・ザ・ブロック』(11)や『サイトシアーズ～殺人者のための英国観光ガイド～』(12)の製作も務めている。2018年、ニラ・パーク、ジョー・コーニッシュらと共に、コンプリート・フィクション・ピクチャーズを設立。





ニラ・パーク(製作)
Nira Park (Producer)

「SPACED ～俺たちルームシェアリング～」(99~01) 以来、『ラストナイト・イン・ソーホー』(21) まで全てのエドガー・ライト監督作品を製作。ほかに『アタック・ザ・ブロック』(11)、『クエスト・オブ・キング 魔法使いと4人の騎士』(19) などのジョー・コーニッシュ監督作品、『宇宙人ポール』(11)、『新クライモリ デッド・フィーバー』(13)、『カムバック!』(14)、『レベッカ』(20) などを製作している。

ジョージ・ヘンケン(製作)
George Hencken (Producer)

テレビ業界でキャリアをスタートさせ、PVやCM製作で経験を積んだ。その後現場を一時的に離れ、マイク・フィギス監督の短編「The 4 Dreams of Miss X(原題)」(07)で復帰。『ドクター・フィールグッド –オイル・シティ・コンフィデンシャル–』(09)、テレビムービー「Keith Richards: The Origin of the Species(原題)」(16) などのジュリアン・テンプル監督作品も担当している。

ローラ・リチャードソン(製作)
Laura Richardson (Producer)

オーストラリア、メルボルン出身。ロンドンに拠点を移し、パラマウント・ピクチャーズの長編映画『Killing Bono(原題)』(11)でキャリアをスタート。ニラ・パークと共に『ベイビー・ドライバー』(17)、『クエスト・オブ・キング　魔法使いと4人の騎士』(19)、『レベッカ』(20)、『ラストナイト・イン・ソーホー』(21) などで製作として参加している。

ジェイク・ポロンスキー(撮影監督)
Jake Polonsky (Director of Photography)

「ドクター・フー」(05~)、「PENNYWORTH／ペニーワース」(19~) で撮影を担当。「ビリオンズ」(16~) では27以上のエピソードで撮影を担当したほか、1エピソードに監督として参加。セカンド・ユニットの撮影監督として『ワールズ・エンド 酔っぱらいが世界を救う!』(13) にも参加している。

ポール・トレワーサ(編集)
Paul Trewartha (Editor)

主な作品に『フェラーリ ～不滅の栄光～』(17)、伝説のサックス奏者ロニー・スコットに関するドキュメンタリー『Ronnie's(原題)』(20)、リドリー・スコット&ケヴィン・マクドナルド製作、ジェイク・スコット監督によるマラソン・ランナーのエリウド・キプチョゲについてのドキュメンタリー『Kipchoge: The Last Milestone(原題)』(21) などがある。











CAST

Ron Mael	ロン・メイル
Russell Mael	ラッセル・メイル
Beck / Gary Stewart / Mike Berns / Jane Wiedlin	ベック　ゲイリー・スチュワート　マイク・バーンズ　ジェーン・ウィードリン
Sal Maida / Christi Haydon / Dean Menta / Harley Feinstein	サル・メイダ　クリスティ・ハイドン　ディーン・メンタ　ハーリー・ファインスタイン
Tony Visconti / Mike Myers / Fred Armisen / Tammy Glover	トニー・ヴィスコンティ　マイク・マイヤーズ　フレッド・アーミセン　タミー・グローヴァー
John Hewlett / Giorgio Moroder / 'Weird Al' Yankovic	ジョン・ヒューレット　ジョルジオ・モロダー　ウィアード・アル・ヤンコビック
Muff Winwood / Nick Rhodes / John Tayler / Todd Rundgren / Flea	マフ・ウィンウッド　ニック・ローズ　ジョン・テイラー　トッド・ラングレン　フリー
Hilly Michaels / Jason Schwartzman / Jonathan Ross	ヒリー・マイケルズ　ジェイソン・シュワルツマン　ジョナサン・ロス
Amy Sherman-Palladino / Dan Palladino / Mark Crowther	エイミー・シャーマン＝パラディーノ　ダン・パラディーノ　マーク・クラウザー
Vera Hegarty / Neil Gaiman / Stephen Morris / Gillian Gilbert	ヴェラ・ヘガーティ　ニール・ゲイマン　スティーヴン・モリス　ジリアン・ギルバート
Katie Puckrik / Patton Oswalt / Steve Jones	ケイティ・パックリック　パットン・オズワルト　スティーヴ・ジョーンズ
James Lowe / Bernard Butler / Scott Aukerman	ジェイムズ・ロウ　バーナード・バトラー　スコット・オーカーマン
David Kendrick / Stevie Nistor / Chris Difford	デヴィッド・ケンドリック　スティーヴィー・ニスター　クリス・ディフォード
Martyn Ware / Alex Kapranos / Paul Morley / Julia Marcus	マーティン・ウェア　アレックス・カプラノス　ポール・モーリー　ジュリア・マーカス
Pamera Des Barres / Roddy Bottum / Les Bohem / April Richardson	パメラ・デ・バレス　ロディ・ボッタム　レス・ボーム　エイプリル・リチャードソン
Lance Rock / Jack Antonoff / John Congleton / Earle Mankey	ランス・ロック　ジャック・アントノフ　ジョン・コングルトン　アール・マンキー
Larry Dupont / Patricia Lowe / Vince Clarke / Andy Bell	ラリー・デュポン　パトリシア・ロウ　ヴィンス・クラーク　アンディ・ベル
Björk / Mark Gatiss / Richard Coble / Nick Heyward	ビョーク　マーク・ゲイティス　リチャード・コブル　ニック・ヘイワード
Ian Hampton / Thurston Moore / Peter Knego	イアン・ハンプトン　サーストン・ムーア　ピーター・クネゴ
Mcihael Silverblatt / Adam Buxton / Tosh Berman	マイケル・シルヴァーブラット　アダム・バクストン　トッシュ・バーマン
Edgar Wright / Rusty Egan / David Weigel	エドガー・ライト　ラスティ・イーガン　デヴィッド・ウィーゲル
Jake Fogelnest / Madeline Bocchiaro / Sue Harris / Ben House	ジェイク・フォーグルネスト　マデリン・ボッキャーロ　スー・ハリス　ベン・ハウス
Evan Weiss / Alex Casnoff / Patrick Kelly / Eli Pearl	エヴァン・ワイス　アレックス・キャスノフ　パトリック・ケリー　イーライ・パール
Simon Pegg (Voice of John Lennon) / Nick Frost (Voice of Ringo Starr)	サイモン・ペッグ（ジョン・レノンの声）　ニック・フロスト（リンゴ・スターの声）

CREW

Directed by 監督
Edgar Wright エドガー・ライト

Produced by 製作
Nira Park ニラ・パーク
Edgar Wright エドガー・ライト
George Hencken ジョージ・ヘンケン
Laura Richardson ローラ・リチャードソン

Editor 編集
Paul Trewartha ポール・トレワーサ

Archive Producer アーカイブ・プロデューサー
Kate Griffiths ケイト・グリフィス

Director of Photography 撮影監督
Jake Polonsky ジェイク・ポロンスキー

Music Supervisor ミュージック・スーパーバイザー
Gary Welch ゲイリー・ウェルチ

Line Producer ライン・プロデューサー
Serena Kennedy セリーナ・ケネディ

2021年／イギリス・アメリカ／カラー／ビスタサイズ／英語／原題：The Sparks Brothers／141分／G／字幕翻訳：石田泰子／字幕監修：岸野雄一
配給：パルコ ユニバーサル映画　宣伝：スキップ　
universalpictures.jp　@Sparks_Movie　#スパークス・ブラザーズ

発行日：2022年4月8日／発行者：大田圭二／発行所：東宝株式会社映像事業部　東京都千代田区有楽町1-2-2／編集：株式会社東宝ステラ　東京都千代田区有楽町1-7-1
デザイン：三堀大介 木村真也（SIREN Inc.）／印刷所：成旺印刷株式会社　東京都千代田区神田神保町3-5
定価：880円〔税抜本体価格800円〕

www.toho.co.jp

2022年3月18日現在の情報をもとに編集・制作を行いました。



崩壊するアメリカから
6時間以内に脱出せよ
『トランスフォーマー』
マイケル・ベイ×ジェイソン・ブラム
『ゲット・アウト』『透明人間』
フォーエバー
THE FOREVER PURGE
パージ
5.20[Fri]
ROADSHOW
PLATINUM DUNES
UNIVERSAL
UNIVERSAL STUDIOS AND PERFECT UNIVERSE INVESTMENT INC.
@uni_horror
R15+
universalpictures.jp
配給:パルコ ユニバーサル映画 宣伝:スキップ
恐怖の最終形態、解禁。エクストリーム・サバイバル・アクション開幕!



4 988104 114945

PARCO